

社会人にとって敬語とは何か

— マナーブックと学校教育の比較から —

上田あき帆

1. はじめに

本研究は敬語についての解説書・手引き・ビジネスマナー書と、学習指導要領・国語表現の教科書を分析・調査し、比較することで、敬語指導の現状を考察し、マナーブックの持つ問題点を明らかにするものである。

国語科で学ぶさまざまな事柄の中で、将来必ず必要になるにもかかわらず、その重要度からは程遠い扱いを受けている項目の一つに敬語がある。多くの人が敬語を学ぶ必要性を感じながらも、敬語を使いこなせず不安を感じることの要因のひとつは、おそらく学校教育における敬語指導のあり方にあるだろう。十分な敬語の知識を持たずに社会に出た学生が、敬語を使う必要に迫られたとき、実際に頼るもののひとつに敬語について書かれたマナーブックがあるだろう。しかし、マナーブックは、学校教育における学習指導要領のように、明確な基準に沿って作られているわけではない。そのため、マナーブックで敬語を学ぶことにはどのような意義があり、問題が生まれるのかは明確になっていない。学校教育での学びと比較することで、マナーブックで敬語を学ぶ際に起こる問題を明らかにすることを本研究の目的とする。

第1章では、「敬語の指針」が与えた影響から、本研究で扱う「敬語」について定義し、現在マナーブックでも問題視されている「マニュアル敬語」の使用とその誤用について先行研究から整理を行い、「相互尊重」と「自己表現」の意識、敬語の5分類について確認した。第2章では、2011年以降に発行された敬語の解説書や手引き・ビジネスマナー書の中から「敬語」と明確に題されたものを抽出し、独自の分類を用いて分析・調査を行い、マナーブックが持つ特徴を明らかにした。マナーブックには、敬語を使用する際、「自己表現」という意識は少なく、「人間関係の円滑化」「自身の品格・評価の向上のため」という目的を意識しているという特徴が見られた。第3章では、学校教育で学ばれている敬語指導の在り方・その特色について学習指導要領、国語表現の教科書を調査し、先行研究を基にマナーブックの特色と比較することで、マナーブックに見られる敬語の問題点を明らかにした。学習指導要領の調査では、学校教育が敬語を「自己表現」として捉えてその場に応じた言葉遣いができるように指導していること、小学校・中学校で行われていた体系的な指導が高等学校で途切れてしまうこと、「相互尊重」の精神についての記述がないことが明らかになり、敬語を重要視しているとは言い難い現状が確認された。国語表現の教科書

調査では、学習指導要領と同様に敬語に対する扱いの不十分さを確認した。マナーブックとの比較では、マナーブックが敬語を道具のように扱うことで、学校教育が持つ自分自身の成長のために学ぶという意識を失っていることが明らかになった。

2. 研究の実際

Ⅰ. 敬語の学習指導を巡る動き（第1章第2節より）

「敬語の指針」は平成17年3月に中山文部科学大臣から文化審議会に対して、「敬語に関する具体的な指針の作成について」が諮問され、作成された、現在の敬語指導のひとつの基準となる目的で作られた答申である。敬語を必要だと感じながらも適切な運用に困難を感じる人々を対象として作られているため、「敬語の指針」では敬語を使用する際の考え方を始めとし、敬語の仕組み、実際の敬語使用の中で浮かんだ疑問点の解説など基礎から敬語について述べている。その中でも、敬語における基本的な認識として「相互尊重」と「自己表現」の考え方を説いている。「相互尊重」は、これからの時代はお互いに尊重し合う心を持って敬語を使っていくべきという考え方である。「自己表現」は敬語の使用を飽くまでも自分自身を表現する手段として使うべきだという考え方である。このような考え方が「敬語の指針」では示されたが、平成20年告示の新学習指導要領に「相互尊重」の明確な記述が見られないなど、学校教育で「敬語の指針」の考え方が定着しているとは言い難い現状もある。

さらに、「敬語の指針」の第2章以降では、敬語を「尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ・丁寧語・美化語」の5種類に分けて解説している。これらは現代の敬語の用法や働きを的確に理解する上で、必要だと考えてのものであり、この5種類に分ける考え方は従来の学校教育等で行われる3種類に分ける考え方と対立するものではないと述べられている。

【表1 「敬語の指針」での敬語の分類】

5種類		3種類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型	尊敬語
謙譲語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型	謙譲語
謙譲語Ⅱ(丁寧語)	「参る・申す」型	
丁寧語	「です・ます」型	丁寧語
美化語	「お酒・お料理」型	

学校教育への5種類の導入についても注目が集まったが、改訂された学習指導要領や教科書から見ても学校教育での敬語は依然として3種類のままであるものが多い。教育現場での敬語の5種類の使用は学校側の裁量に任されたまま現在に至っている。

Ⅱ. マニュアル敬語と解説書

1. マニュアル敬語と解説書

マニュアル敬語とは「職場での言語使用、特に接客の場面での言語使用について具体的な言語表現などを示すもので新入職員や臨時職員の指導に

用いられるものを指す」ものであるとして、その過剰な使用が問題視されている¹。マニュアル敬語の過剰使用の問題について「敬語の指針」では、いつでも、どんな相手にでも、限られた言語表現だけを画一的に使うことは、相手、例えば顧客にかえって不快な思いを与えたり、その場になぞわれない過不足のある敬語使用になったりすることにつながりやすい。

として、マニュアルに偏った過剰な使用を批判的に述べている²。また、マニュアル敬語だけを絶対視する態度を避け、マニュアル敬語だけで敬語表現は十分であるという認識も改めるように述べられている。これは「敬語の指針」が述べる敬語を「自己表現」として使用するという考え方と相いれないためである。

そのようなマニュアル敬語の事柄を踏まえた上で、マニュアル自体が「敬語にまだ習熟していない人、特に、その職場に特有の言語場面での敬語にまだ不慣れな人のためには有効なものであるということも指摘したい」と述べるなど、敬語に不慣れな人が敬語を学ぶきっかけであり有効な手引きとしてのマニュアル敬語の存在を認めている³。

2. バイト語

マニュアル敬語の過剰使用の問題と関連して、敬語の解説書・手引書の中でしばしば間違った敬語表現を紹介する際に「バイト語」という表現が使われる。「敬語の指針」には表記されなかった言葉であり、若者に多い敬語の間違いを述べるときに使われる傾向にある。また、「バイト語」と似たような使われ方で、「になります語」「ファミコン語⁴」といった表現もある。若者言葉の乱れと並び批判される「バイト語」とは何であるのか、本項で考察を進める。

「バイト語」という語彙は解説書・手引書ではどのように扱われているのだろうか。「社会人なら絶対おさえておきたい敬語きほんのき（梶原しげる）」では、「こちらのほうがハンバーグになります」「生ビールになります」といった例文を示して「バイト語」について次のように述べている⁵。

「なります」は「尊敬語」でも「謙譲語」でも「丁寧語」でもありません。「美化語的表現」でもありません。強いて言えば「バイト語」です。

このように言及される「バイト語」であるが、「バイト語」そのものについての明確な定義は、今回調査した解説書・手引書の中には見当たらなかった。また、「バイト語」という表現はされていないが「敬語のレッスン（梅津正樹）」では、レストランでよく耳にする言葉として「ご注文の品

1 文化審議会答申「敬語の指針」（2008）,p9

2 同上 p10

3 同上

4 ファミレス・コンビニ語の略称

5 梶原しげる（2012）「社会人なら絶対おさえておきたい敬語きほんのき」,PHP 研究所,p16

はお揃いになりましたでしょうか？」という例を挙げ、次のように“マニュアル敬語”の間違った表現を指摘している⁶。

それぞれの店や業界で引き継がれている敬語は“マニュアル敬語”などと言われますが、パターン化して受け継がれているようですね。しかし、そうした“マニュアル敬語”の中には、この例のような間違っただ敬語も少なくありません。

マニュアル敬語自体は、前項で述べたように、「敬語の指針」でも敬語に不慣れな人には有効な手段であると評価されていることから、問題とされているのは“マニュアル敬語”の明らかな誤用という点である。「敬語の指針」にも、敬語を使用する際の留意点として敬語の明らかな誤用や過不足を避けることを心掛けるという記述があるため、マニュアル敬語の誤用を言及する際に、誤用であるにもかかわらず使われ続けている表現を批判的に「バイト語」と表現しているといえるだろう。

これらのことから、本論文では「バイト語」を「マニュアル敬語の中でも明らかな誤用であるものを批判して述べる言葉」として定義する。これらの誤用は若い人の間で多く、マニュアル的に敬語を解説した解説書や手引書でも誤りを指摘する表現が多い。社会人になる学生が敬語の誤用をする場合の問題として、こうした「バイト語」を使用してしまうことが一つの原因として考えられる。マニュアル敬語にだけ頼りすぎることは一つの問題であるが、それ以上に明らかな誤用の表現であるにもかかわらずマニュアルとして使うことが、解説書や手引書では大きく取り上げられるといった傾向にあるだろう。敬語に不慣れな人が敬語になれるためには、マニュアル敬語が有効な手段であるからこそ、「バイト語」のような明らかな誤用は避けられるべきだろう。

Ⅲ. マナーブック調査（第2章第1節，第3節より）

今回の研究では16冊の書籍について調査を行う。選考の基準は以下の通りである。

- ①2011年以降発行された敬語に関する解説書や手引きであること。これは「敬語の指針」が答申されたのが平成19年(2007)であることから、「敬語の指針」の内容を多少なりとも踏まえて作成されたものだと考えられるためである。
- ②そのうち「敬語」と明確に題されたもの、または副題になっているものであること。

この基準を基に、マナーブックを調査する際には以下の4点に着目して分類を行った。

- ①敬語を学ぶ目的②相互尊重・自己表現としての敬語の使用③敬語の分類④解説の形式
- の4点である。

第2章での調査の結果をまとめたものが次の表である。

⁶ 梅津正樹(2012) 「敬語のレッスン」創元社,p50

【表2 敬語を学ぶ目的調査結果】

	該当冊数
①人間関係の円滑化	13
②品格・評価の向上	13
③社会人として必要な能力	8
④自己表現	4

【表3 相互尊重調査結果】

	該当冊数
①相互尊重と明記	3
②他者を尊重	6
③記述なし	7

【表4 敬語の分類調査結果】

	該当冊数
①5分類	5
②3分類	7
③表記なし	4

【表5 解説書・手引きの解説の形式調査結果】

	該当冊数
①一問一答形式	7
②正誤問題形式	3
③登場人物形式	4
④文法の解説中心形式	2

上記の結果を踏まえ、マナーブックの特徴を考察する。

表2と表3の結果は、どちらも敬語を使用する際の心の在り方の問題である。敬語を学ぶ目的は、「自己表現」の項目が少なく、「人間関係の円滑化」と「品格・評価の向上」の項目が多い。また、「相互尊重」の精神を明記しているテキストは少なかったが、他者を尊重する気持ちの在り方を述べているものと合わせると、約半数の本が敬語について「相手を敬う」という解説をしていた。一方で、「相手を敬う」という記述がないものも同数あった。これは「敬語の指針」で取り上げられている敬語を使う際の心の在り方が、「自己表現」と「相互尊重」であることを考えると、必ずしも「敬語の指針」に述べられている考え方とマナーブックの考え方は一致しているわけではないことが分かる。

敬語を自らの品格や評価のために、ある意味、道具や装飾品のように扱おうとする考え方を「品格保持の敬語」としてとらえる先行研究(渡辺(1974))が確認できた。敬語が「敬意を表現する」だけのものではなく、自分の品格を保つために用いるなど、幅広い意味合いを持ってきているという考え方について、菊地(2005)は次のように指摘している⁷。

高校生がバイト先のハンバーガーショップでお客様に「こちらでお召し上がりですか。」と述べる場合の意識は「敬意」の表現ではなく、〈社会的モード(=社会性の高い発話態度)〉で述べているという意識であろう。(中略)敬語を使うということは、〈社会的モード〉で述べるということであり、また〈社会的モード〉で述べていることを「示す」ことでもある。生まれて初めて「こちら」や「お召し上がり」を使った高校生は、〈社会的モード〉で話すことで、「社会人」的な装いの自分を感じて、多少のうれしさや誇らしさを感じていいることだろう。

こうした、「敬語を使うことができる自分自身を演出することで、社会に適応しようという考え方」が、表2の敬語を学ぶ目的の調査結果で、①人間関係の円滑化、②品格・評価の向上、③社会人として必要な能力という項目を多くのマナーブックが取り上げていたことから伺えるだろう。こ

⁷ 菊地康人(2005) 『『敬語とは何か』がどう変わっているか』(日本語学 24(11),p17)

のような独特の意識は、マナーブックの特徴ではないだろうか。何よりもまず、敬語で自分を変えることで〈社会的モード〉になり、その結果相手を敬うことができたり仕事がうまくいったりするという、敬語を便利な道具のように捉えている意識がマナーブックの表現からは読み取れる。

IV. 学習指導要領における敬語の扱い(第3章第1節第1項より)

平成20年度版小学校学習指導要領解説国語編で敬語について述べられている部分を挙げていく。中央教育審議会答申における「国語科の改善の基本方針」では、敬語について、小学校から高等学校まで一括して次のように述べられている⁸。

敬語の指導については、人間関係を円滑にし、日常の言語生活を豊かにするため、相手や場に応じた言葉遣いが適切にできるようにすることを重視する。(下線筆者)

このような敬語指導の方針からは、学校教育は敬語を学ぶことで「人間関係を円滑」にするだけではなく、「言語生活を豊かにする」という自己を成長させる目的を持っていると考えられる。

中学校学習指導要領では改訂の中で敬語を重視し、体系的な知識や指導の必要性を述べている。敬語の体系的な指導・または留意点について次のような記述がみられた⁹。

中学校においては、個別的・体験的な知識を整理して体系付けるとともに、人間関係の形成や維持における敬語のもつ働きを十分に理解させる必要がある。基本となる尊敬語、謙譲語、丁寧語について理解させるようにする。文化審議会答申「敬語の指針」に示されている尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ(丁寧語)、丁寧語、美化語の5種類については、生徒の実態に応じて取り上げることも考えられる。(下線筆者)

小学校では、日常でよく使用される敬語について、個別な知識として学んできた経験を基に、中学校での指導では、敬語の知識を体系づけることが求められている。これらの記述からは、実践的な言語活動よりも、文法的な知識や敬語の分類を学校教育が重視していることが窺える。また、敬語についての分類を従来のままの3分類であるとし、「5種類は生徒の実態に応じて取り上げることも考えられる」という記述にとどめられていることが分かる。

高等学校では、敬語について「必要に応じて扱うこと」としている。これは言い換えれば、必要がなければ取り扱わなくてもよいとも解釈できるだろう。高等学校での敬語の学びは重要視されているとは言い難い現状が確認された。

学習指導要領の記述から、小学校・中学校での系統的な指導が、高等学校で途切れてしまうという実態が明らかになった。その一方で、小学校・中学校の学習指導要領からは、「言語生活を豊かにすること」＝自己表現のために敬語を学ぶことを目指していると考えられる。

このような特徴の他にも、敬語指導は言語活動例の記述がなく、知識や文法重視で実践的な学びを指導するように求められていないことが分かっ

⁸ 平成20年度版小学校学習指導要領解説国語編,p5

⁹ 同上 p79

た。関連して、学習指導要領全体を通して、敬語について「他者を尊重する」や「相互尊重」の考え方についての記載は見られなかった。学校教育での敬語の扱いについて、川本(2005)は、敬語に関連した学習指導要領の内容から次のように述べている¹⁰。

学習指導要領は、あるいは、中央教育審議会答申は、学校教育で養うべきものを「生きる力」と言う。日本語力は勝れて「生きる力」である。さらに、敬語は日本語力の中でも最も重要な「生きる力」と言ってもよい。学習指導要領的な表現で言えば、「社会生活に必要な言語能力」ということになる。にもかかわらず、敬語はその重要度にふさわしい扱いを学習指導要領の中で受けていない。つまりは学校教育、国語科教育の中でさほど重視されていないのである。(下線筆者)

前項の学習指導要領の考察からも分かる通り、敬語を多くの人が必要であると感じているにもかかわらず、学習指導要領や教科書でそのようなニーズに応じた取り上げられ方をされていないことが、学校教育で敬語を扱う際に問題視されている。

このような学習指導要領の指導の実態を受けて、先行研究では学校教育での敬語指導に、知識の指導だけでなく、実践的に敬語を使用する活動が求められている。さらに、敬語を学習する指導時間の少なさ・体系的な指導がなされないことから、高等学校など日常で使う敬語が必要になる段階で十分な指導時間・指導内容が確保できない問題が指摘されている。

V. 学校教育とマナーブックとの比較・考察(第3章第2節より)

本節では前項で述べた学校教育の特徴・問題点と、マナーブックの持つ特徴、「敬語の指針」との比較から、マナーブックが持つ問題点について考察するものである。

1. 敬語を使う心構えの在り方

学校教育で敬語を扱う心の在り方として、広く問題として扱われるものが「敬語表現と待遇表現(敬意表現)」の問題である。これは、「敬語表現」が知識獲得を目的とした狭義の指導であることに対して、「待遇表現(敬意表現)」は敬語の使用を含め、敬語を用いない場合の相手への気遣いの表現を相手や場と関連させて指導する考え方である¹¹。学校教育では「敬語表現」ではなく「待遇表現(敬意表現)」を指導すべきだという考え方が、平田(2007)、原田(2011)、坂本(2005)等によって支持されている。つまり、敬語を含んだ相手を尊重する心構えを指導しようという傾向が学校教育の敬語指導で研究者たちの間で議論されているのである。これを比較すると、第一節で述べたマナーブックの特徴である「敬語で自分を飾ることで〈社会的モード〉になり、その結果相手を敬うことができたり仕事がうまくいったりするという意識」は、学校教育とは対照的である。学校教育は「自己表現」を心の在り方とする「敬語の指針」と、敬語を扱う心遣いの点では近い部分がある。

2. 解説の在り方

¹⁰ 川本信幹(2005) 「日本語力と敬語力」日本語学 24(11),p69

¹¹ 原田大樹(2011) 「敬語指導の現状と課題:小学校国語科を中心に」日本教科教育学会誌 34(3), pp.26-27 を参考

学校教育が知識獲得に偏り、指導時間の減少の中で実践的な指導が求められている反面、マナーブックでは実践重視の解説が扱われている。実践的に敬語を使っていく上で最も効率的に敬語を身につける手段が、正誤問題形式やシーン別用例形式であると考えられているため、文法的な知識よりも実践を重要視する傾向がマナーブックにはあるだろう。こうしたマナーブックの知識よりも実践を重視した敬語の学び方には前述の菊地(1994)の指摘もある¹²。学校教育で知識や実践を十分に身につけることができなかったことが、マナーブックが敬語の知識の紹介を重視せざるを得ないことの一因として考えられる。知識と実践、どちらに重きを置いても不十分さが生じてしまう現状があるのだろう。

3. 相互尊重の心の在り方

学習指導要領の調査で、「他者を尊重する」や「相互尊重」という敬語を使う際の心の在り方が記載されていないことが明らかになった。学習指導要領内で、敬語は丁寧な言葉遣い全体をしめしており、敬語には様々な役割があることも指導上留意すべきだとされているが、「他者を尊重する」気持ちの在り方は述べられていない。一方でマナーブックでは約半数の書物が敬語について「他者を尊重する」や「相互尊重」について述べている。学習指導要領には見られない、「他者を尊重する」という観点、マナーブックの約半数において確認できることは特筆すべきことであると考えられる。

4. マナーブックの持つ問題点

学校教育での敬語指導では多くの問題点が指摘された。高等学校での指導時間の減少により体系的な指導がなされていないこと、さらに学習指導要領に言語活動例の記述がなく実践的な活動がなされていないことなどが挙げられる。高等学校で、古典のために敬語が指導される傾向にあることも注意しなければならない点である。

マナーブックにも独特の形式が見られた。学校教育では扱われていない実践的な会話形式・正誤問題形式を多く用いていることや敬語を学ぶ目的として「人間関係の円滑化」とともに「品格・評価の向上」を取り上げていることなどがそうであるだろう。

マナーブック独自の良さがある一方で、学校教育と比較したことで批判されるべき点も明らかになった。調査結果から分かったことであるが、マナーブックには自己表現のために敬語を学ぶという目的は少ない。学校教育では、敬語を学ぶことで生徒が語彙力・表現力を獲得し、人間的な成長へと繋がるのが目的である。人間的な成長のために「敬語で学ぶ」のではなく、マナーブックは「便利な道具」として「敬語を学ぶ」ことを目的としていることがひとつの大きな違いとしてあるだろう。人間としての成長のために敬語を学ぶこと、マナーブックに失われている「教育」と言う考え方を学校教育での敬語指導は秘めている。

マナーブックの表現は敬語を苦手としている人の興味を惹きやすく、手に取りやすいような言葉を大きく見出しとして使い宣伝しているが、そのために「自己を表現する」という敬語を扱う際の心構えを失ってしまっているのではないだろうか。もちろん、人間関係を円滑にしたり品格・評価

¹² 本論 p7

を向上させたりすることも社会人にとっては重要ではあるが、「他者を敬い、自己を表現する」という心構えを忘れて、敬語を道具のように扱うようになることは避けるべきだろう。

「敬語の指針」が目指していた敬語指導とは、そのような人間的な成長を含んだものであるため「相互尊重」と「自己表現」を心の在り方として持っているとも考えられるだろう。

VI. 国語表現教科書調査（第3章第1節第3項より）

高等学校で実際に扱われている「国語表現Ⅰ」「国語表現Ⅱ」の教科書を調査することで、学校教育での敬語指導の扱われ方を、教科書の面から考察を行った。

対象は、従来の学習指導要領（平成11年文部省告示第58号）に基づいて編集された検定済み教科書12点である。

敬語の分類の調査では、3分類を用いている教科書が12点中5点、4分類（尊敬語・謙譲語・丁寧語・美化語）を用いている教科書が5点、敬語の分類について解説がないものが2点であった。表記のゆれはマナーブックにも見られた特徴ではあるが、学校教育の場で教科書によって指導に差異が見られることは、好ましいことではないだろう。学校教育では敬語の分類にも一層慎重になる必要があるのではないだろうか。

学習活動（言語活動）の調査では、敬語と共に扱われている学習活動を「手紙を書く」「電話のかけ方・応対」など7項目に分類した。結果は、「手紙を書く」活動が4点と最も多く見られた。しかし、ロールプレイなどの実践的な活動は見られなかったこと、ひとつの教科書に掲載されている学習活動はひとつまたはふたつであったことなど、マナーブックで扱われている言語活動と比較しても十分な活動が行われているとは言い難い現状が確認された。

教科書の調査からも学習指導要領の記述の不十分さが裏付けられる結果となった。

【表6 国語表現教科書調査結果】

教科書名	出版元	①分類	②学習活動(言語活動)	③待遇表現	④場所
国語表現Ⅰ	東京書籍	3分類	手紙・電話	×	△単元
国語表現Ⅰ改訂版	三省堂	×	×	敬語から敬意表現へ	△単元
国語表現Ⅰ改訂版	教育出版	3分類	言い換え	待遇表現	△単元
新編国語表現Ⅰ	明治書院	3分類	手紙	×	付録
高等学校改訂版 国語表現Ⅰ	第一学習社	4分類	分類・正誤	×	単元
国語表現Ⅰ改訂版	京都書房	4分類	×	×	単元・コラム

教科書名	出版元	①分類	②学習活動(言語活動)	③待遇表現	④場所
国語表現Ⅱ	東京書籍	×	×	×	△単元
国語表現Ⅱ改訂版	三省堂	4分類	×	×	コラム
国語表現Ⅱ	教育出版	4分類	電話・手紙・面接	敬語と敬意表現	コラム
精選国語表現Ⅱ	明治書院	3分類	言い換え・手紙	敬意の表現	コラム
高等学校国語表現Ⅱ	第一学習社	3分類	言葉の役割を考える	×	付録
国語表現Ⅱ改訂版	京都書房	4分類	×	×	付録

1. マナーブックとの比較

②「学習活動（言語活動）」の項目調査で、敬語と共に扱われる学習活動に「手紙を書く」「電話のかけ方・応対」「敬語への言い換え」が多い

ことが明らかになったが、同時に一つの教科書で取り上げることができる学習活動が1種または2種のものがほとんどであることも分かった。この結果を基に、敬語を用いた活動についてマナーブックと比較する。

第2章で調査対象としたマナーブックを用い、マナーブックでの敬語を用いた学習活動を調査し、国語表現の教科書調査と比較した。国語表現の項目である、「電話のかけ方・応対」「手紙を書く」「面接練習」「敬語への言い換え」「言葉の役割を考える」「分類」「正誤問題」に、特に多く見られた「冠婚葬祭」「接客」の場面を加えた9項目についてマナーブックでも同様に分類を行った。結果は以下の通りである。

【表7 マナーブックの活動】

番号	書名	活動・場面設定
1	敬語のレッスン	電話・接客・正誤
2	仕事がうまくいく！敬語の単語帳	手紙
3	就活の敬語	手紙・電話・言い換え・正誤
4	敬語「そのまま使える」ハンドブック	電話・手紙・面接・接客・冠婚葬祭
5	社会人なら絶対おさえておきたい敬語きほんのき	電話・言い換え・正誤・接客
6	美しい敬語を身につける本	電話・正誤・接客・冠婚葬祭
7	敬語の疑問が全て解ける本	×
8	きれいな言葉づかいと好感度アップの敬語	手紙・電話・言い換え・接客・冠婚葬祭
9	正しい敬語が身につく本	手紙・電話・冠婚葬祭・接客・正誤
10	言えないと恥ずかしい敬語一発変換550	手紙・電話・冠婚葬祭・接客・正誤
11	美しい日本語と正しい敬語が身につく本	電話・言い換え・接客・正誤
12	頭のいい人が使っている敬語のルール	手紙・電話・接客・冠婚葬祭
13	「きちんとした敬語と表現」がすぐに見つかるビジネスメール言い換え辞典	手紙・言い換え
14	敬語ひとり稽古	電話・手紙・正誤
15	新人OLと3時間！一緒に覚える敬語	電話・手紙・接客・正誤
16	即効ビジネス・マナー敬語・挨拶・身だしなみや交際接待まで君の毎日を徹底サポート	電話・手紙・接客・冠婚葬祭

手紙	電話	面接	言い換え	役割	分類	正誤	冠婚葬祭	接客
11	13	1	5	0	0	9	7	11

マナーブックの調査の結果からは、1冊のマナーブックで敬語を用いた活動が多いもので5点、平均して3点以上あることがわかった。これだけでも、マナーブックが教科書よりも敬語について多様に、多くの活動を掲載していることがわかる。「手紙を書く」という活動は国語表現の教科書にも多くあった一方で、国語表現にはない「接客」に関する敬語の表現が同様に多くみられることは社会人を想定したマナーブック独特のものであるだろう。

特に「接客」は、マナーブックでは大きく取り上げられている項目ではあるが、国語表現の教科書には見られない学習活動である。社会に出て実際に必要となる項目が教科書で取り扱われていない実態には、マナーブックや実際の敬語使用の意識との差異を感じざるを得ない。

少なかったものは「言葉の役割を考える」「面接練習」「分類」の項目であった。「言葉の役割を考える」や「面接練習」といった項目は他者と

行うものであり、学校教育という空間でこそ活動として成立するものであ
らう。

これらの結果からみると、国語表現の教科書は学習活動においても扱っ
ている内容の専門性においてもマナーブックと比べて充実しているとは言
い難いだろう。学習指導要領で高等学校の敬語指導についての記述が不足
しているという背景が、国語表現の教科書にも影響として表れているの
ではないだろうか。

さらに、学習活動の内容からは実践的な敬語学習を取り扱ったマナーブ
ックとの差異も感じられた。「接客」「正誤問題」などの項目の違いは、
敬語使用に関する意識が学校教育とマナーブックの意識のズレを表してい
るだろう。

「国語表現Ⅰ」は「国語総合」との選択必修の科目であり、「国語表現
Ⅱ」は選択科目という位置づけである。今回調査した全ての教科書が敬語
について程度の差はあるが解説をしていたことは、学習指導要領の「国語
表現」の部分に解説がなかったことを考慮すれば、敬語の必要性は理解さ
れていると言ってもいいだろう。しかし、選択科目である「国語表現」の
教科書の内容は、全ての学生が学ぶものではないため、高等学校での敬語
についての指導は学校側の裁量に任されていることになる。このような学
習指導要領と教科書の実態が敬語に対する不安を感じさせる一因になっ
ているのだろう。

3. 今後の課題

今後の課題として3点を挙げる。

1点目は、調査対象の不十分さである。今回調査したマナーブックは2011
年以降に発行された16冊であるが、より正確な調査のためには更に多くの
本を調査対象として研究をする必要があっただろう。

2点目は、「相互尊重」の扱いについて十分考察ができなかったことであ
る。学校教育における「相互尊重」の記述については更に調査を進める
べきである。

3点目は、教科書調査の問題である。高等学校の敬語指導の不十分さを
指摘する際、学習指導要領と国語表現に頼り、実際扱われている国語表現
以外の教科書を調査できなかった。国語表現の教科書には見られなかった
が、国語総合の教科書で補われている知識や言語活動例もあっただろう。
それらを調査し、明確に高等学校の敬語指導の不十分さを指摘することが
課題として挙げられる。

4. 引用文献一覧

- ・菊地康人(2005) 「『敬語とは何か』がどう変わってきているか」 (日
本語学 24(11), pp. 14-22)
- ・川本信幹(2005) 「日本語力と敬語力」 (日本語学 24(11), pp. 66-75)
- ・文化審議会答申 「敬語の指針」(2007)
- ・文部科学省(2009)『小学校学習指導要領解説 国語編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/28/1231931_02.pdf

・ 文部科学省(2009)『中学校学習指導要領解説 国語編』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_002.pdf

(うえだ あきほ 駒ヶ根自動車学校)